

展覧会感想

東海道草津宿山内家文書前島密書簡と 「飛脚から郵便へ」展

八 杉 淳

1 東海道草津宿と山内家文書

東海道草津宿は江戸から52番目の宿場で、宿内中央部において中山道を分岐する。その宿勢は天保14年（1843）の『東海道宿村大概帳』によれば、家数586軒、人数2,351人、本陣2軒、脇本陣2軒、旅籠屋72軒を数えた。また、人馬の継立を担う問屋場は1か所設けられていた。その問屋場において、宿の運営を掌る宿役人として問屋役・年寄など24人がおり、8人ずつ交代で問屋場に詰めていた（東京大学法学部法制史資料室所蔵「草津宿庄屋駒井家文書」）。その宿役人を勤めた1軒が山内家である。

山内家は、草津宿内の問屋役の由緒を書き上げた「由緒書」によると（草津宿街道交流館蔵）、宝暦元年（1751）に初代孫右衛門の名がみえ、二代目孫右衛門が天明8年（1788）に、三代目が文政元年（1818）から同5年まで、五代目が安政3年（1856）から、それぞれ問屋役に付いている。さらに、二代目孫右衛門は、寛政3年（1791）からは地下方年寄役、翌年に宿方庄屋役も勤め、近隣村の仕法に尽力した功によって膳所藩の郷代官並となり、草津宿近郷の4か村の支配を任されている。四代目も同様に郷代官に任ぜられ、13代徳川家定に嫁いだ有君の下向に際して人馬継立方を任せられ、鳥目500文を下されている。これらの由緒によると、二代目山内孫右衛門のころから、草津宿の運営にかかわるとともに、膳所藩領の近隣の村支配にかかわるまでになっていた。その後も幕末に至るまで草津宿運営を担う要職を勤めている。

明治になると、明治4年（1871）に導入された郵便制度のもと、江戸時代の宿駅を引き継ぐ草津駅での郵便御用を請け負ったのが山内球五郎であった。そして球五郎の兄にあたる駅逓権助・山内頼富は、郵便創業者である前島密のもと、関西で活躍し、前島密に請われて東上したともいわれている。山内頼富は、天保5年（1834）に生まれ、草津駅問屋取締役などを歴任。明治元年（1868）6月に駅逓司筆生となり、7月には京都伝馬所掛になっている。そして、同9年に駅逓権判事、11月に判事へと累進。明治3年ころから山内頼富は前島とともに郵便創業に労苦を共にしていく。その後も近代郵便制度の実施にあたり西日本で中心的役割を果たした。しかし、駅逓寮大阪出張所での度重なる不祥事によって、明治8年（1875）6月、郵便取締役であった山内頼富は管理者としての責任を問われ辞職を余儀なくされたが、明治12年（1879）12月には再び駅逓にかかわる職に復職。明治17年（1884）に退官。翌明治18年7月30日、52歳の若さでこの世を去った。

草津での郵便業務の淵源は、明治4年（1871）の前島密による近代郵便制度の導入に始まり、東海道筋にあった草津では、明治4年3月1日に郵便取扱所が設けられ、宿場の問屋場が名を変えた伝馬所において事務がおこなわれた。このとき、草津の郵便御用を請け負ったのが山内頼富の兄・山内球五郎である。伝馬所に置かれた郵便取扱所は、宿駅時代の問屋場から、明治6年（1873）山内氏の自宅に移したが、事務が増えて狭隘になってきたため、明治32年7月に

栗太郡草津村の六五四番屋敷を買い取り10月9日から改築に着手、翌33年1月27日に完成、28日に移転。2月4日に移転式を執り行い、業務を開始した（「郵便電信局改築費明細書」）。

さらに郵便制度とともに、草津で電信が開設されたのは明治26年（1930）、電話が明治43年のことである。「電話開設ニ付局舎改築費」によれば、先の明治33年に新たに移転改築した郵便局に、電話業務を併設するため、明治42年10月27日から局舎改修に着手し、43年3月中に改修を終えた。その改修費が409円余りであったと記されている。ちなみに、『草津百年のあゆみ』（昭和45年刊）によれば、開設当初の電話加入者数は22戸であったとされている。

この山内家に伝わる史料調査の過程で、差出に「前島密」名のある書状を数点確認できた。山内家文書全体としては膨大な資料点数であるが、その大半は近代以降の文書が占め、内容は a 草津宿関係文書、b 地方関係文書、c 郵便関係資料、d 典籍類、e 書簡等に大別でき、その点数は11,500点を数えた。

このほか、郵便関係資料では、明治10年代の郵便事業にかかわる辞令関係ほか、明治30年（1897）の「局長達并願伺届指令出編冊」や、同じく明治30年代の「監督局長達并願伺指令書編冊」ほかなどの通達類の簿冊、明治42年（1909）の「電話開設に付局舎開設費」、明治43年（1910）の「滋賀県草津郵便局敷地図」などの郵便局舎にかかわるものなどがある。さらに、郵便関係では各種取扱帳簿類も多く残されており、帳簿類は拾い上げれば暇がないが、明治後半期から昭和にかけてのものが数多く残り、詳細に分析することで草津における郵便のありようをうかがうことができる貴重な史料であることはいままでもない。

② 前島密書簡公開と草津宿街道交流館2014年秋季テーマ展

このほど確認された前島密関係資料は、明治4年（1871）から明治13年までのもので、草津郵便局宛の公的な通達などを含め、山内頼富個人へ宛てた年賀状など20点である。2013年7月に「日本近代郵便の父・前島密の明治政府の内情を書き綴った年賀状を発見！」のタイトルで報道発表を行った。報道発表に先立って、元国立歴史民俗博物館の山本光正先生からご紹介をいただいた通信総合博物館・井上卓朗郵便資料部担当部長兼主席資料研究員に相談。「郵便史研究会」においても史料内容等を検討してもらった。纏まったかたちで、明治初期の書状が確認されたことは歴史的に意味のあるもので、報道発表では関西のテレビ番組でも大きく紹介された。今回の史料の発見については、井上卓朗主席資料研究員から、

- 1) 宿駅改革と郵便創業に深くかかわった、当時のブレン同士のやり取りで、明治初期の実態を知り得る貴重な資料であると思われる。
- 2) 前島密の書簡を丹念に検討することにより、前島密と山内頼富の親交の深さだけでなく、当時（維新时期）の政情に関する詳細な情報もうかがい知ることができる。
- 3) 本資料の研究を進めることによって、前島密、山内頼富個人に関する研究に留まらず、維新时期の政治史研究進展の手がかりとなるかもしれない。

という評価をうけ、報道発表後に草津宿街道交流館において速報展示を行った。

その後、郵便史研究会の指導などを受けながら書状の分析を進め、これを機に草津宿街道交流館では手が付けられていなかった飛脚・郵便に焦点をあて、2014年秋にテーマ展の開催に向け準備を始めた。時折しも井上卓朗氏や埼玉県立歴史と民俗博物館の杉山正司副館長、物流博物館の玉井幹司学芸員などから「街道資料ネットワーク」の連携企画の働きかけもあり、郵便関係の史料については郵政博物館の全面的な協力もあって、2014年9月20日から同年11月3日まで草津宿街道交流館秋季テーマ展「飛脚から郵便へ」が開催できたのである。【写真：テ

【マ展チラシ】

飛脚については、草津宿本陣が雲州松江藩の七里飛脚取次所になっていたこともあり、関連文書や印鑑などとともに、郵政博物館から協力いただいた飛脚の道具類も展示。また、郵便関係では、ほとんどを郵政博物館所蔵の制度創設期関係史料を展示。大きく2つのテーマで、近世における書状伝達と近代の郵便制度創設期のすがたを紹介した。

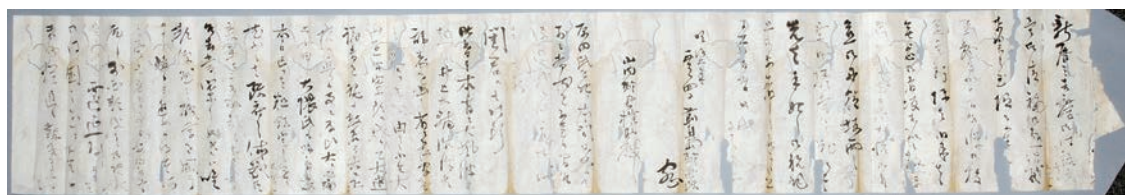
あわせて、前島密とともに近代郵便制度創設に関わった山内頼富についても取り上げ、山内頼富の駒廻寮出仕後の辞令書とともに、前島密からの書簡類によって2人の親交などについても紹介した。前島密と山内頼富の交流をうかがう書状については、「明治六年山内頼富あて前島密年賀状」がある。冒頭には、「新暦の吉慶御同禧の事ニ御坐候」と年始の祝詞を述べて

いる。そして、「愈御丹精坂西の事案御担当の程祈り上げ候」といった文面からは、山内頼富が西日本の郵便事務を担っていたことがうかがえる。興味深いのは、その追記部分であり、昨年暮れに「本省」＝駒廻寮に大風波が起き、井上馨や渋沢栄一が辞表を提出。省に長官が不在の状況となって、のちに物議を醸すこととなった井上・渋沢二人の財政改革意見を認め、数名とともに稟議に東奔西走したこと。そして、この騒動も大隈重信の帰京によって粗方は終結するであろうこと。また、政府は種々変革の時期にあるものの、自分としては「郵便屋の職業を固ク守リ」駈々と進めるのみであると綴っている。井上、渋沢の二人の免官は明治6年5月14日となっているが（岩波書店『近代日本総合年表 第二版』1984）、この年賀状では、すでに明治5年暮には辞表を提出していたとされ、おそらく秋田県の尾去沢鉱山事件や予算編成をめぐる騒動によって、辞意を固めていたことがうかがえるのである。【写真：明治6年年賀状】

こうした明治政府の内情とともに、前島が自ら「郵便屋」の決意を認めている。これは、山内とともに労苦をともに創設し、明治4年に全国に実施された郵便制度を確固たるものにして、自らの職務を貫徹する決意を山内頼富に伝えているのである。さらに「書外、猶追々報告申し



秋季テーマ展チラシ

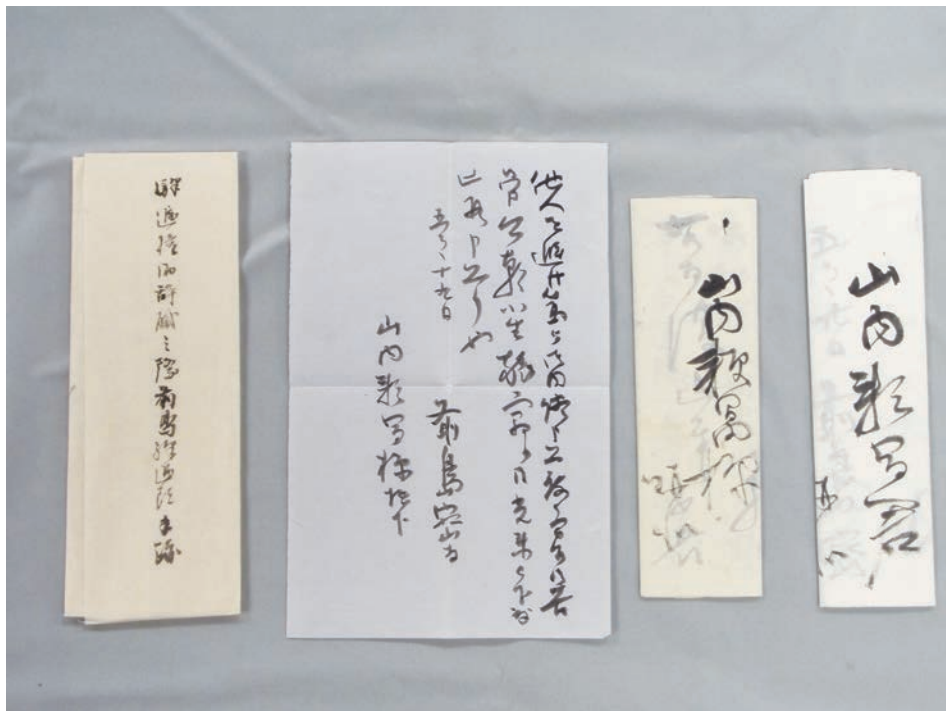


明治6年年賀状

上げる可く候」と結んで、今後も情勢を引き続き報告すると言っていることなどからも、前島は山内に対して信頼を寄せ、二人の親交の深さをうかがい知れる資料の一つであるといえよう。

次に、「駅逡権助辞職之際前島駅逡頭手跡」と表書のある包紙で一括された3通で、明治5年（1872）4月に駅逡寮大阪出張所の郵便取締役に就いた山内頼富であるが、官員録によれば駅逡寮七等出仕で、駅逡寮においては前島駅逡頭に次ぐ二番目の地位にあったとされ、さらに明治7年には山内頼富は駅逡寮権助に昇格している。しかし、明治8年（1875）後半の官員録には山内頼富は見えない。このころ、大阪出張所における椿事が露見し、大阪出張所の最高責任者であった山内頼富は辞職を余儀なくされている。椿事の内容については、澤まもる「駅逡寮大阪出張所で何が起きたのか」（『郵便史研究』第20号 郵便史研究会2005所収）をはじめ、郵便史研究者によって紹介されている。どうもこのころ、郵便物の不配や為替手形の抜き取りなどが頻発していたようで、この実態を調査するため明治8年5月14日に前島は大阪へ出張してきている。その5日後の5月19日に、山内頼富は辞表を提出しており、前島はその日に「他人を避け、篤と御内談申し上げ度候間、御苦勞乍ら今朝、小生旅寓え御光来下され度く、此段申し上げ候也」と書簡を送っている。翌20日には、「昨日は御辞表御差し出しにて御情緒如何あらんと深く恐察仕り候」と辞職を気遣い、「再度の時ヲ深カニ御待ち成られ候様、一二祈り奉り候」と再起を願う文面を綴っている。また、5月30日には、在阪中に観劇のお供をしたいが、何分多忙で今日、明日には神戸出帆の汽船で東京へ戻らねばならず、その暇がないことを詫びている。【写真：駅逡権助辞職之際前島駅逡頭手跡】

次に、明治9年（1876）と思われる年賀状であるが、山内頼富がたびたび懇書を送っていたにもかかわらず、「多事多忙にて心外の無音」を詫び、「御来書中の文意ニ就て、貴意の所在ヲ憶想仕り候得ば、自然好機あらハ御再勤成され度く思召ニも有る可く御座哉と存じ奉り候」と記している。前島は、山内頼富の書き送った書簡から山内の心の内を慮り、再勤を強く願っていることがうかがえる。今回発見された資料のなかには、この年賀状を最後に、前島と山内の私的な交流をうかがうものは確認されていない。



駅逡辞職手跡

明治9年の年賀状以降の資料としては、山内頼富が郵便業務にふたたびかわりをもつこととなる明治12年(1879)と翌13年に出された駅通局長内務少輔前島密名で、明治12年は「規画課事務取扱」を、翌13年には「規画課郵便線路改正掛」を命じた辞令書があるのみである。明治8年の辞職後から明治12年に復帰を果たすまでの間、山内頼富の動向については、詳細に検討する余地がある。

ほかにも前島が岐阜県令参事からの書簡に対する返書の文章が「甚だ不文章にて長々しき冗言も多く、是でハ迎もいかぬと存じ候」と記したのものや、明治7年(1874)明治政府に反対する佐賀士族が蜂起した佐賀の乱の最中、「其出張所の士官一体に失胆錯乱ヲ生じ」ているとはいえ、「郵便切手は消印もこれ無く、又書留郵便にて青緑の掛ヶ糸もこれ無く、又日附検印もこれ無く、右等は何様の次第二これ有り候や」と不備を指摘し、「逡送の不都合これ無き様着実処分致し候社肝要の理」として、この非常時にこそ逡送の不都合がないように対処することが肝要であると気骨を記し、山内にも「憚り乍ら貴兄ニも篤と御用心」されたいと書き送ったものである。

また、大風のため舟に乗れず、自分が麻疹にかかって馬車にも乗せてもらえなかったため、駕籠で帰ったというような些細なことから、当時の政治情勢にかかわることなどまで多岐にわたる記述がみられ、これらを管見するだけでも二人の親交の深さがうかがえるとともに、当時の政治情勢の一端をうかがううえで貴重な資料であるといえる。

3 まとめ

草津出身の山内家文書から発見された前島密書簡によって、2人の親交とともに前島がその制度創設において山内頼富の手腕に大きく期待を寄せていたことなどが読み取れる。また、この書簡が確認されたことで、幕末から維新期の変革期にあって、飛脚制度や近代郵便制度について目を向ける機会となったことは、草津市にとっても大きな成果であることはいままでもない。

これらの前島密の書簡を含む「山内家文書」のさらなる解明を進め、近世の草津宿や幕末維新期の宿駅改革や郵便制度創設、さらには近代以降の草津の郵便制度の実態についても明らかにする必要がある。

(やすぎ じゅん 草津市立草津宿街道交流館 館長)